

「お姉さんと一緒に JOY COOKING」 (楽しいこども料理教室)の試み

成田 美代*・磯部 由香*

これは、平成13年度フレンドシップ事業として、小学生との「たのしい料理教室」に取り組んだ実施報告である。著者らにとって初めての試みであったので、とまどうことも多かったが、教育実習を経験していない大学生にとっては、小学生を理解する良い機会となった。

キーワード：フレンドシップ事業、こども料理教室、お姉さんと一緒にJOY COOKING

1. はじめに

近年、家庭科の立場から教員養成の現状を省みると、入学してくる学生について、生活体験の乏しさからくる教授技術の稚拙化、家族構成の変化による人間関係形成の未熟さなどからくる基礎的指導力の低さをいかに育成すればよいか課題が多い。特に実験・実習科目の履修においては、カリキュラムの改正などによる科目や時間の削減などにより大きく制約されている。

今般、フレンドシップ事業の目的は「教職を志す学生に対し、種々の体験活動を通して、子ども達とふれ合い、子どもの気持ちや行動を理解し、実践的指導力の基礎を身につけることができるような機会を設けるものであること」とされており、この事業により、今述べた問題に対し、少しでも教育効果を得ることが出来ればと考え、導入を試みた。

なお、このフレンドシップ事業は1997年(平成9年)から文部省によって、教員養成学部に対し、教職を目指す学生の、子ども理解と指導力向上をはかる目的で導入された制度で、全国各大学によって実施されている。三重大学においては、1997年度に「小専美術」、1998年度以降には「教育工学」「電子工学実験」の中で実施され、それぞれその経過や問題点などが報告されている。^{1) 2) 3)}

2. 実施までの経過

1) 事業実施の発端

a. フレンドシップ事業の募集・応募

平成13年2月8日付け12高専教第6号により文部科学省高等教育局専門教育課教育大学室から教員養成学部に対し、平成13年度の「教員養成学部フレンドシップ事業促進等経費」の要求書の提出を求める照会状が出された。これが2月15日付けで三重大学教育学部長から照会されたのを受け、応募した。この事業はその概要と共に担当教官のどの授業科目で実施するかが問われる。そこで、履修学生数の多い「調理実習Ⅲ」の中で実施する計画をたてた。

また実施内容の概要は、近年若者(子どもをはじめ)の食生活の乱れが憂慮される中、本事業によって若者(子ども)に望ましい食生活のあり方として、日本型食生活と地域(地域食材)を見直すきっかけとなればとの期待から、「日本型食生活と三重の郷土食」をテーマを行うことを計画した。

b. 既実施者への聞き合わせ

我々にとっては初めての取り組みであるため、三重大学教育学部において既に実施されていた教科の教員に聞き合わせなどを行い、種々の指導を受けた。その中である程度実施上のポイント、問題点など具体的に把握することが出来た。特に報告書¹⁾は多くの参考となった。

* 三重大学教育学部家政科

c. 企画運営協議会の設置・後援名義の取り付け

フレンドシップ事業実施の留意事項として、都道府県や指定都市教育委員会などと連携・協力するために企画運営協議会の設置が明示されていた。そこで、三重県ならびに津市の教育委員会での聞き合わせを行い、多くの助言と協力の意向を得、実施の可能性が確認できた。実際には、申請時点と新年度になってからでは人事異動があり、同じ話を二度も行うという手間がかかった点はやむを得ないことであった。

また、具体的な実施計画が完成した後、参加児童の募集に当たっては、両教育委員会の後援をいただいた。

2) 実施のための事前学習

a. 学生への動機づけ

学生に対しては、新学期に入って、2年生対象の「調理実習Ⅰ」ならびに2・3・4年生対象の「調理実習Ⅲ」の授業開始と共に、フレンドシップ事業の概略の説明を行い、申請が認められれば実施することをアナウンスしておいた。

以下の学習は、申請が認められてから進めていった。(実際、申請が認められてからの進行であったため、すべての行動が余裕なく進めざるを得ないところがあった。)

フレンドシップ事業の意義については、改めて一人ずつ文章化させた。このことにより動機付けならびにそのステージを高めるのに効果的であると考えた。

b. 実施献立の検討・選定

フレンドシップ事業で実施する献立を決定するに当たり、申請のところでも述べたように、その原則として、出来るだけ、日本型食生活に沿っていること、三重の郷土食を尊重できること、地元の食材を使用できるものであること、もとの食材から調理するものであること、安全のため包丁操作を少なくすること、栄養のバランスを考慮すること、廃棄物の少ない献立に心がけること、操作方法は出来るだけ単純なものがよいこと、食品衛生の観点から生ものは使用しないこと、一般の家庭で作れるものであるこ

と、などを考慮していくつかりストアップし、主食・主菜・副菜・汁物・デザート毎に、何度かの話し合いで決定した。



写真1 仕上り献立

今回計画した献立は写真1に示すように次の5品である。

主食……あらめごはん

主菜……いわしバーグ・炒め野菜きのこ添え

副菜……ほうれん草のお浸し

汁物……あさりのみそ汁

デザート…白玉だんご

c. 実施献立の試作

学生各自が、班単位でこどもの動きと時間の経過、調理の進行を一目瞭然に理解できるようにタイムテーブルを作成し、それを比較検討して良いと思われるものを採用し、共通のタイムテーブルとして試作・予行演習時に使用した。

e. 事業名の決定

楽しい雰囲気が伝わるようにとの意図から、表題のように「お姉さんと一緒にJOY COOKING」とし、小学生に英語が難しいと思われたので、副題として～楽しいこども料理教室～を付けた。

3) 実施のための計画

a. 実施場所の決定

大学以外の施設も考えたが、こども達が大学校舎に入ることには意義があると考え、大学で行うこととした。さらに問題は実習する部屋である。大学の調理実習室は実習台の高さが大人用であるため、小学生には不適切であることから、

学習机と兼ねている家政実習室を使用することにした。また広さの点からも家政実習室の方が望ましい。

b. 実施日の決定

学生の希望と我々の予定を総合して、8月7日(火)に決定した。

c. 対象とする子どもの選定

実習献立の決定や実施場所とも連動させながらの決定であるが、参加学生を見たとき、小学校を主とするコースを選んでいる学生が多いことから、小学生を対象とした。また学年は家庭科の履修経験を有する方が学生との交流において円滑であると考え、6年生とした。また受け入れ人数としては参加学生の人数と実習室の広さを踏まえ、30名とした。なお、当初の計画では20名としたが、参加希望者が多いことが予測された(夏期休暇中であること、料理教室であることなどから)ので、開催案内には受け入れ可能最大数としての30名とした。

d. 参加児童の募集と参加者

資料に示すように、保護者宛の募集要項を作成し、津市教育委員会を通して、津市の23小学校の6年生児童1,610名、および附属小学校児童には家庭科担当教員を通じて配布した。

その結果、12名の応募があった(男子4名、女子8名)。予測数を大きく下回ったが、小学生は夏休みには塾や学校のプールなど、行事で忙しいとのことであった。来年度実施する場合の検討課題の1つである。

e. 来賓者の参加要請

附属小学校教諭、公立高校教諭、短大教員3名、元大学教員(元附属小学校長)、計6名の参加を得た。

f. 参加学生の確認

「調理実習Ⅰ」履修者は6名全員参加とし、「調理実習Ⅲ」履修者は希望者とした。さらに大学院生も参加希望者は受け入れた。その結果、学生の参加人数は17名であった。

g. 材料の提供依頼

今回献立に取り入れたきざみあらめについては、三重県漁業協同組合連合会ならびに三重県あらめ協同組合から寄付を受けたものである。

その際、教材用としてそのまま乾燥させたあらめならびにパンフレットについても寄付を受けた。なお、きざみあらめ(生のあらめを蒸して乾燥させ、細く切ったもの)、そのままのあらめ(蒸さずに乾燥させたもの)、パンフレットはこどもにおみやげとして持たせた。

h. 傷害保険の対応

調理実習では、包丁や火を扱うため、1日だけの傷害保険に加入して、万全を期した。

4) 冊子の準備

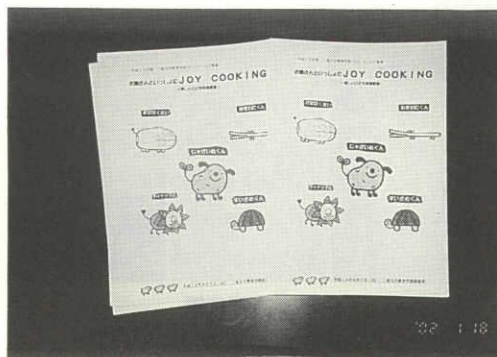


写真2 冊子

写真2に示すような冊子を印刷した。構成は、表紙、はじめに、メニュー一覧、注意事項、作り方、資料の頁から成り、合計12頁になった。特に、作り方の箇所はそれぞれの献立ごとに担当学生(説明担当の学生、2年生)が責任を持って、作成した。児童に関心を持ってもらえるように、イラストを活用、また操作については図で示すなどの工夫をした。

3. 実施前日までの準備

1) 前日までに準備すること

出席学生・参加児童の確認・班分け(参加児童数を元にして今回は4班編成で実施することとした。また班毎に必要な物品は、色で識別できるようにした。)、班毎の必要器具・食器類のチェック、不足分の充当、調味料・材料リスト作成と発注、児童用アンケート作成、冊子作成、前日・前日・当日の役割の分担と確認、作り方

を入れたパスケースなどを準備した。

2) 前日の準備

一部調味料計量・分配、前日搬入材料の受領・分配、器具類・食器類の消毒、家政実習室の準備（テーブル配置、ガス台点検など）、名簿・名札作成、学内案内掲示3ヶ所（写真3）、ゴミ袋・ゴミ処理の準備、氷作成、見本あらめの展示準備などを行った。

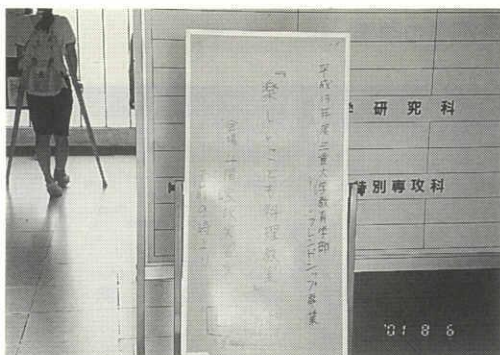


写真3 案内板

3) 事前打ち合わせ

事前の打ち合わせは、合計4回行った。その中で、前日の打ち合わせは全員集まり、その後前日の準備を行った。

なお前日（8/6）のスケジュールと仕事内容（かっこ内は担当学生名）は、

- 10:00 集合・打ち合わせ
 冊子印刷（2年薦田・荻野・立木、森岡指導）
 実習室掃除・設営（2年の班代表、3・4年）
- 13:00 班別調味料・前日材料の分配（班単位で責任もつ）
 班別器具などの分配・運搬・設置（班単位で責任もつ）
 学内案内掲示（藤本、大澤、竹内）
 その他の人は3の2）前日の仕事全般
- 夕方 食器・フキンを滅菌籠に入れ替え、滅菌器へ（食器は各班で。成研に

2かご、磯部研に2かご、ふきんは加藤、小泉）

最後に冊子に沿ってもう一度打ち合わせ確認後、解散

4) 役割分担

当日必要な仕事について、仕事内容と準備物を確認し、前日までに各自確認してもらった。当日の仕事の担当と仕事の内容・準備物については次の通りである。

- 当日受付 金森・藤本
 準備物 名簿（児童・学生・来賓）、名札、冊子、パンフレット、あらめ（20g入り）
 仕事内容 名簿でチェックし、班を指示する（児童誘導・来賓誘導）
 冊子、パンフレット、名札を渡す、帰りにあらめを渡す補助
- 身支度・手洗い指導 米田・矢田
 準備物 爪切り、石鹸、消毒液
 仕事 髪の毛・爪の指導、三角巾・エプロンの着用指導、手洗い指導
- 記録係 竹内
 準備物 進行表、ビデオ、カメラ、テープ、フィルム
 仕事 進行状況のチェック、ビデオ設営、バッテリーとフィルムの取り替え、バッテリー充電、写真撮影、試食準備が早くできた班から記念撮影
- 来賓係 岡田
 準備物 弁当、433室準備、反省会・企画運営協議会の茶菓（18+2+10=30）、皿、フォーク、湯呑みまたはコップ
 仕事 弁当運び、お茶の用意、反省会の茶菓を出す準備
- 実習の進行……2年生（詳細は次項に記述）
- 実習関連
 米炊き・班に配布 森岡（炊飯器2台）
 出し取り 大沢（出し取り用フキンまたはこし器）
 ハンバーグ焼き補助 森岡・大沢（前日にガ

ス台1台余分にセット、ハンバーグ焼きに必要な道具を4班分と別に準備する事、その必要物品のリストを作り、4班以外の色で準備する)

共通器具準備 森岡

お盆 氷・氷水・冷却剤(冷却剤・氷水を入れる発泡スチロールの箱・次の仕事と連携)

お茶沸かし・冷まし 松下・岡田(冷却剤・氷水を入れる発泡スチロールの箱、やかん・お茶)

滅菌食器運搬 松下、米田、矢田

滅菌ふきん運搬・各班配布(朝1番に)

加藤・小泉

見本あらめの準備・片付け、その他諸々

米田・矢田

4. 実施当日の経過

1) スケジュールとその概要

学生たちは8:00集合、児童ならびに来賓の受付は8:30からで、9:00開始である。その後の流れは別紙の通りである。実施風景を写真で示す。受付風景(写真4)、受付で名札と冊子の配布並びに班への誘導を行う。時間になるまでに各班に配属の学生が手洗いや身支度の指導を行う。時間になったらはじめに司会担当の学生が開会のあいさつを行い、次いで各班毎に自己紹介をし(写真5)、その後、各献立ごとに担当の学生が冊子に基づいて手順を説明する。実習は予め作成し、予行演習を行ったタイムテー



写真5 班毎に自己紹介



写真6 人参の切り方師範



写真7 いわしのすり身作り



写真4 受付風景



写真8 いわしバーグ丸め



写真9 いわしバーグ丸め



写真10 試食開始

ブルに従って進める。人参の切り方を説明している学生(写真6)、すり鉢でいわしのすり身をする児童を手伝いながら指導する(写真7)、大学生と一緒にいわしバーグを丸める児童(写真8、写真9)、盛りつけ・配膳が出来て試食をはじめようとしている(写真10)。

スケジュールと担当者名は次の通りである。

- 8:00 集合、家政実習室開錠、エアコン on、滅菌器電源 off、当日材料配布
- 8:30 受付開始、適身支度・手洗い指導
- 9:00 開会宣言、あいさつ、本日のスケジュールの説明……大学、薦田
- 9:05 班毎に自己紹介
その後注意事項の説明……薦田
- 9:10 実習説明……汐田、河合、奥川、立木、水井
- 9:40 実習開始……薦田(いわしの手開きから始めること、班代表者がいわしの指導を始めることを告げる)
- 11:40 盛り付け・配膳(いすを持ってきて

着席するように班毎に指導)

- 12:00 試食開始あいさつ……河合
(4班揃っていること)
- 12:30 試食終了あいさつ、片付け開始……河合
- 13:30 片づけ終了後児童アンケート配布・説明……水井
- 14:00 アンケート回収、おみやげ配布、児童解散……河合
反省会……茶菓準備・おみやげ配布
- 15:00 反省会終了・来賓お見送り・後片づけ

2) 実習後の後かたづけ

- 家政実習室の復元(全員)
- ゴミ処理……各班に設置したビニール袋は燃えるゴミ・燃えないゴミ毎に回収し、3階廊下のゴミ入れに廃棄する。段ボール箱・発泡スチロールの箱などは(加藤・小泉)
- ふきんは各班でよく洗って(洗剤使用)から、折り畳んで滅菌篋に入れる。滅菌篋を滅菌室に入れる。(加藤・小泉)
- 食器類・調理器具類はよく洗って、3階調理実習室の所定の位置に返却・格納。(2年)
- 洗浄道具一式は、三角コーナーに入れたまま、3階各班の実習台の上に返却。

5. 実施後の評価・反省会

1) 児童の評価

予め作成しておいたアンケート用紙を配布し、その場で回収し、後日集計した。その結果は次の通りである。すなわち、80%の児童が今回の活動を「楽しかった」と回答していることは何よりであった。また今回作った料理の味については、ほうれんそうのお浸し以外は概ね好評であったが、栄養学的バランスの点から取り入れた緑黄色野菜料理についてはやはり好まれなくて問題であった。今後の課題であろう。

大学生に対する感想では、やはり8割の児童が「優しかった」と、よい評価を出してくれており、フレンドシップ事業の趣旨が生かされた

と考えられる。

児童のひとこと(意見)を記載すると、「とても楽しかったです」「つかれた」「お姉さんたちがとてもやさしかったし、すごく楽しかったし、おいしかった」「とても良かったのでこの活動を続けていってください」「家では料理はしないけど、やって楽しかったしおいしかった」「話ができたと、お姉さん達が優しかった」「どれも楽しくてよく分かった」「楽しかったです。家で作りたいです!」「今日はいろいろ料理を教えてくださいありがとうございます」「楽しかったです。食べる量が多かったです」など、肯定的積極的意見が多かった。

2) 参加学生の反省・評価・総括

フレンドシップ事業の趣旨が生かされたか、子供の理解は出来たか、こどもとの交流は十分に出来たか、こどもはどんな反応をしたか、実習メニューの趣旨は生かされたか、うまく伝えられたか、実習メニューは適切であったか、準備は適切であったか(各自の心の準備も含めて)、改善するところ、この教室を通して気付いたこと、各自の責任は果たせたか、その他なんでも気づいた点を、反省会での意見ならびに報告文による記述をまとめる。

学生の意見は、実習内容に関して、多い学生にとっては予行演習を5回経験していることから、自信を持って臨むことが出来た。また実習をスムーズに行うために、献立ごとに、1班ごとに必要な調味料を予め計って準備しておいたことが、当日のスムーズな進行に大いに役だったとの意見が多かった。

児童との接触では、大学院生・4年生はすでに教育実習で経験を何度か積んでいるが、3・2年生は初めてであるため、多くの不安を持っていた。しかし実際に始めるとすぐに打ち解け、また4年生・大学院生の児童の対応を参考にし、習得していった。しかし、経験不足から予想しない事態に対しては、臨機応変に対応できなかった。

やはり準備の大変さについては、主体的に取り組んだ2年生にその意見が多かった。

3) 来賓の評価

児童を帰した後、全員で反省会・企画運営協議会を行った(写真11、写真12)。頂いた意見を順不同で列記する。「児童の体力を勘案したとき、内容・スケジュールが重い。」「児童が当初緊張していた。学生も教えるということに重点を置きすぎていて、それが児童に楽しいと感じさせるのに時間を要した。児童の目線に合わせて対応する必要がある。」「献立の数が多く、大学生が多かったので、児童に達成感を得させ難かったのではないか。」「今日の教材は『生の素材から調製する』『地域でとれる食材を使用するいわゆる地産地消の精神が生かされていた』などの目的は十分に果たせていたが、生の素材から全部作ることで、『料理はめんどくさい』という気持ちを植え付けないように、途中では機械力を導入するなどしても良いのではないか。」「献立が多いが、一食揃った食事を学べて良かった。」「小学5年の学習内容の応用で良かった。」



写真11 反省会(学生)



写真12 反省会(来賓)

「黒板を活用すれば良かった。」「大学生による口頭の説明だけでなく、師範があった方が良かった。」「実習室が殺風景で、もう少し飾り付けや花などで、華やかさがあると良かった。」「早くに名前を覚えて名前と呼ぶと、親しみがわいて子どもも打ち解けるので、名札などの対応は良かった。」など概ね良好な多くの意見を頂いた。

4) 実施者の評価・反省

我々実施者側も初めての試みであったため、かなり緊張していて余裕がなかった。応募者が少なかったのは実施時期が不適切だったのか、募集時期が遅かったと思われる。準備をはじめ、実施のための負担が大きかった。

児童にとって朝9時から試食までの3時間はかなりハードであったのか、途中でいすに座ったりしていた。学生にとっても朝8時集合は、前日の準備の上の8時なので、負担が大きかったと思われる。

また児童の中で前日の無理の上に参加したためか（前日熱射病になったとのことであった）、気分が悪くなった児童が出た。本人の意向もあって、途中で自宅にお迎えを依頼した。このような不測の事態は予想しなかった。かえって、準備した事故に関しては万全で、問題は起こらなかったことは幸いであった。また役割分担でフリーになっていた大学院生が、この突発的な出来事の対応に当たることができて、フリーな学生がいたこと、およびそのスタッフが大学院生であったことから、てきぱきと対応ができてよかった。

今回の献立は客観的には理想的であるが、献立数が多かったと思われる。学生が共に調理したが、調理時間がかかり、児童には負担が大きかったと思われた。また、実習手順の説明を立ったままで行ったが、児童が落ち着かなかったという大学生の指摘があり、通常の大学のやり方をそのままそっくり導入したもので、児童の実態・小学校の実施方法などの比較検討なども必要であった。

実施教室に関しては、参加児童数・参加学生数、4班編成であったことから、適切であっ

たと思われる。

また実施側の負担の問題として、使用器具・食器なども非常に多く必要で、その準備と後かたづけにも多大の物品・時間を要した。しかも3階の調理実習室から4階の家政実習室へ運ばねばならないなどの余分の作業が伴った。

とにかく今回初めての試みで、考えてみれば実習することに精神を集中しすぎた感がある。ただ児童が楽しんでくれていたのは何よりであった。

7. 総括

次年度以降実施するのであれば、今年度の経験は大いに参考に出来る。

このフレンドシップ事業の趣旨を十分に生かすためには、企画・立案から運営・実施まですべて学生主体で行うことができれば理想であろう。またそこまで活用できれば、土井の述べているように⁴⁾⁵⁾、総合的な学習の時間を担う教員の育成にも多大の貢献が出来るのではないだろうか。

また既存の授業の中で計画を立てたが、諸般の事情でかなり困難であるかとおもうが、この趣旨にかなう授業科目を創設できれば望ましい。信州大学のように、このフレンドシップ事業の発足以前から実施されている「信大YOU遊サタデー」（目的は学生生活の活性化、大学の教育力を社会に生かす、学校週休5日制導入による学校役割のモデル的事業、学生の実践的指導力の育成など）の事業を振り当てているが、これなどは良い方法であろう。⁶⁾ 既存の授業科目の活用では参加できる学生に制限が生じるし、もっと多くの学生が、またどの専攻の学生でも参加できることを考えるべきである。

宇都宮大学の例⁷⁾では、既存の授業科目である「理科教育法」を活用し、参加大学生は受講生20名に理科専修生・環境教育課程生20名計40名で、参加児童を延べて1回目276名、2回目330名の規模で実施している。ここでの問題は施設・設備である。調理関係となると、どうしても施設・設備の制約がある。しかし、一般

的に調理に関する実習は人気が高く、地域で実施されている会場では目一杯活用されている。今回参加児童が少なかったが、もし応募・希望があったとしても現状では施設・設備の問題がネックとなる。今後の課題であろう。

謝 辞

ご助言いただきました三重県教育委員会、津市教育委員会、川口元一教育学部長、教育学部技術科松岡守先生・センター須曾野先生に感謝いたします。児童の募集にご協力いただきました津市内小学校の校長先生、担任の先生方、また子供会会長様に感謝いたします。当日開始時刻から反省会までご参加いただき、貴重なご意見を賜りました来賓の先生方に感謝いたします。既実施者の松岡先生のご参加に感謝いたします。また材料の一部(刻みあらめ、見本用乾燥あらめ)のご提供をいただいた三重漁連に感謝いたします。

参考文献

- 1) 三重大学教育学部: 平成 10 年度三重大学教育学部フレンドシップ事業「エレキッズ(ELE-KIDS)教室」実施報告書
- 2) 須曾野 仁志: フレンドシップ事業「中学生のためのインターネット入門教室」の実施と課題、三重大学教育実践研究センター紀要、第 19 号、7~16、1999
- 3) 松岡 守: フレンドシップ事業「エレキッズ教室」の実施と課題、三重大学教育実践研究センター紀要、第 21 号、55~64、2001
- 4) 信州大学教育学部附属教育実践総合センター: 平成 12 年度フレンドシップ事業報告書(その 1) 地元教育機関と連携した「教育参加」の実践(第 5 集)
- 5) 信州大学教育学部附属教育実践総合センター: 平成 12 年度フレンドシップ事業報告書(その 2) 第 2 回フレンドシップ事業全国学生シンポジウム報告書
- 6) 信州大学教育学部附属教育実践総合センター: 平成 12 年度フレンドシップ事業報告書(その 3) 第 7 期「信大 YOU 遊サタデー」の実践
- 7) 宇都宮大学教育学部: 平成 12 年度宇都宮大学「フレンドシップ事業」実施報告書